

初

朴

能村 研三

不自由を過ごす

咲き満ちてむしろ暗さの花の蔭
鋏の柄を杖にして聴く百千鳥
清明や遠景にみる鋏さばき

照り降りや落花塗しの女坂

徳川家康の遺訓に「不自由を常と思えば不足なし」とあるが、この三か月、沖の各例会の会場での開催ができず、日常からすれば不自由な環境となった。幸い紙上句会という方法で各句会の幹事役の皆さんの献身的なご尽力により、多くの方々の参加を得て交流の句会が持てた。主宰、副主宰の選に加えて蒼茫集の代表の方の選ももうことになったが、いつものような参加者全員の互選は行うことができなかった。日常とは違う不自由がここにもあつたわけだが、ここは家康の遺訓に倣って我慢するしかない。

俳句の世界では不自由と言ってもこれくらいのことなので、我慢ができる範囲なのだが、世の中では、この不自由が明日の生活にも影響を及ぼし深刻な事態に陥っているところもある。

飛花落花禍々しきを祓ひたり

川越して変はるしきたり若葉冷

棕櫚縄を濡らして使ふ垣手入

湯がかれて筍の身のほの白し

今朝咲きし初朴に礼深くせり

家籠りの沙汰に卯の花月夜かな

こと、放縦を意味しているが、仏教で「自由」とは、なにものにも捉われない境地のことを意味する。

人間はこれまでに経験したことのない有事となれば、短い時間の間にいろいろと考え出すもので、これまでの型といったものにあまりとらわれず、その型を打ち破って新しい知恵と勇気が出てくるものであることを実感した。

ITを利用したテレワーク、オンライン会議なども世間では急速に取り入れられたり、九月入学ということも俄かに議論され始めた。

俳句は昔から連衆が集まる座の文学と言われ、いわゆる「三密」の中でも「密接」「密集」が座を形成する上で必要とされるので、悩ましいことである。

しかしながら、連衆が皆健康でいることがもつとも大事なこと。今しばらくは、通信による句会の限られた選の中で自問自答しながら句を推敲し、不自由を発条としていかなければならないのだろう。

能村 研三